

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月31日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究（S）

研究期間：2008～2012

課題番号：20672001

研究課題名（和文） ユダヤ教の人間観—マイノリティに関するテキストのデータベース化と現代社会への提言

研究課題名（英文） Judaism's view of humankind: creation of a textual database on minorities and suggestions for modern society

研究代表者

勝又 直也（KATSUMATA NAOYA）

京都大学・大学院人間・環境学研究科・准教授

研究者番号：10378820

研究成果の概要（和文）：ユダヤ教におけるマイノリティの問題に関連する原典資料（ヘブライ語、アラム語）を、時代、地域、ジャンルを問わず収集、精読、分析し、日本語と英語に翻訳したうえで、データベースの構築を目指した。データベースはほぼ完成し、現在一般公開に向けて準備中である。さらに、このデータベースを十分に利用して、ユダヤ教の人間観に関する包括的な図書の執筆も進めている。

研究成果の概要（英文）：We gathered primary texts (in Hebrew and Aramaic) related to the problem of minorities in Judaism without regard to era, region or genre, read them carefully, analyzed them, translated them into Japanese and English, and registered them in a database. The database is almost completed, and we are currently preparing to open it to the general public. By making full use of this database, we are also composing a comprehensive book on the nature of the Jewish view of humankind.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	16,600,000	4,980,000	21,580,000
2009年度	16,000,000	4,800,000	20,800,000
2010年度	16,000,000	4,800,000	20,800,000
2011年度	16,000,000	4,800,000	20,800,000
2012年度	16,800,000	5,040,000	21,840,000
総計	81,400,000	24,420,000	105,820,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、宗教学

キーワード：ユダヤ学、ユダヤ教

## 1. 研究開始当初の背景

## (1) 国内における未熟なユダヤ教理解

国内においては、ユダヤ教研究は依然萌芽状態であり、個々の研究者の関心に限定された研究が断片的に行われていた。ヘブライ語聖書以来、幾多の困難を乗り越えて現在に力強く生き延びたユダヤ教の文学遺産を原典から学術的、包括的に研究するプロジェクトはなかった。

何よりも欠けていたのは、ヘブライ語聖書

成立以降のユダヤ教文化の発展に関する知見であり、ミシュナ・タルムード等、中世以降のユダヤ文化の骨格を形づくる文献において、ユダヤ教の姿を原典に即して提示することが求められていた。キリスト教（とりわけ西方教会）を中心とした宗教史観、歴史観を相対化すると共に、宗教研究をより包括的な水準に引き上げる為にも、キリスト教・イスラームに寄り添いつつ発展してきたユダヤ教の文化意識を、広い射程から捉える研究

が必要とされていた。

## (2) ユダヤ教を軸としたマイノリティ研究の必要性

海外のユダヤ教研究では、自身が他者から「差別」「阻害」されるマイノリティであったことには高い関心は寄せられてはいるが、ユダヤ教内部の「マイノリティ」はあえて取り上げられることはなかった。

現代社会においては、かねてから人間性の疎外が憂慮されている。特に、外国人、移民、同和問題、障がい者、性的マイノリティ、子ども等、様々なマイノリティへの尊厳が確立しているとは言い難い状況である。

ユダヤ教の莫大な文学遺産を対象に、世界のユダヤ教研究において顧みられなかった「ユダヤ教内部のマイノリティ」という視点から、関連する言説を収集し、分析することによって、現代社会が直面するマイノリティを含めた人間性への問いに対して提言を発する必要がある。

## 2. 研究の目的

### (1) ユダヤ教におけるマイノリティ観の収集と分析

本研究は、上記のような状況を鑑み、歴史を通じて「マイノリティ」としての存在を余議なくされたユダヤ教内部での様々な「マイノリティ」の在り方とその変遷を分析、理解することによって、様々な問題に直面する日本をはじめとする現代社会において、いかにたくましい人間として存在するか、そして、いかに人間としての尊厳を維持するかについての提言を行うことを目的とした。

### (2) ユダヤ教における人間観の重要性

構想段階で前提としたのは、ユダヤ教が人間に対する思索を中心として発展してきた、という確信である。ユダヤ教の「世界観」や神に対する思索、所謂「ユダヤ神学」を取り扱うこともできただろうが、現在までの研究を通じて確信されていたのは、何よりも人間の概念がユダヤ教文化の理解の要であるということである。ユダヤ教は人間をどのように理解してきたのか？ これを理解することは、ユダヤ教を単に宗教的な思弁としてではなく、実際に数多の人々によって生きられた文化として捉えることを意味する。

## 3. 研究の方法

### (1) データベース構築

ユダヤ教はその長い歴史のなかで膨大な文献を生み出し、かつそれを保持し続けてきた。ユダヤ教の人間観を包括的に提示するにあたってまず問題となるのは、対象となる文

献の途方もない広がりである。

これに即した研究方法として、本研究は文献データベースの構築をひとつの目標に据えた。「人間」に関するキーワードを中心に膨大なユダヤ文献の中から様々な発言を拾い集めてくることで、地域的・時代的限定のないユダヤ教の人間観の中核部分が浮き彫りになるはずである。

具体的には、ヘブライ語聖書、紀元前後のラビ・ユダヤ教文献、中世ユダヤ思想文献、神秘主義文献、近現代のユダヤ思想家や作家の著作等の膨大な文献を渉猟して、文献内に出てくる「マイノリティ」に関する言説を収集することにある。全時代を通じたユダヤ教文献を対象とし、原語（ヘブライ語、アラム語）、英語訳、日本語訳の3言語による構築を目指した本データベースは、日本のみならず世界のユダヤ教研究に大きな貢献をもたらすものである。

### (2) マイノリティへの眼差し

さらに、このようにして構築されたデータベースを元にして、研究論文、発表などを通して、ユダヤ教の中の「マイノリティ」の扱い、そして人間観から学べることを社会に提言することも、本研究の大きな目的である。

具体的には、「人間観」をユダヤ教の中核に据えて研究する以上、膨大な文献の全てが「ユダヤ教の人間観」に関わってくるであろうことは避けられない。ともすれば曖昧な「人間」の概念を取り扱うための視座を、予め画定しておく必要がある。

本研究を特徴付けるのは、ユダヤ教の人間観を人々との差異から解き明かしてゆく、という視座である。人々を差異化するユダヤ教の諸観念、とりわけ、ユダヤ共同体内部における諸種の政治的・社会的マイノリティの取り扱いにおいて、ユダヤ教が人間をどれほど多様に理解しつつ、それをひとつの体系のなかに包含していったかが明らかになる。このことは、現代社会の諸問題を理解するうえでも示唆に富む視点であるといえる。

この点はまた、長い歴史を通じて社会的マイノリティであり続けてきたユダヤ共同体が、内部にマイノリティを抱え込むという興味深い現象を析出することで、マイノリティ理論一般に対しても大きな貢献をなす筈である。

## 4. 研究成果

本研究の成果は、大別して(1)構築されたデータベースそれ自体と、(2)データベースの構築過程で明らかになった人間観の提示に分かれる。

### (1) 構築されたデータベース

「ユダヤ教の人間観」に関して、これまでに本研究が蓄積してきたデータは、主として以下の5つの文献群から抽出された。

- a. ヘブライ語聖書
- b. ミシュナ
- c. タルムード
- d. マイモニデス(中世哲学)
- e. 近現代ヘブライ語文学

ユダヤ教が人間をとらえる際の様々な言明をこれらの文献から抽出すると共に、個々の言明が関わる人間の差異化の基準をカテゴリライズし、タグとして個々の文言に付加する形でMySQL データベースが構築されている。

データの参照に際しては、

(i) 文献群を単位としたブラウズ

(ii) 個々のタグをキーとした検索

という二つの方法を用いることができる。

基礎となるデータはヘブライ語・アラム語のユダヤ文献の原典であり、個々のデータに対して可能な範囲で英訳・和訳を付加することで、言語的基礎のない閲覧者にも個々の文言の内容が把握できるよう、配慮している。

構築されたデータベースは、現在直面している技術的・制度的な問題が解決され次第、公開する予定である。

技術面の問題の第一は、データベースのシステムそのものに関わる。上記 a, b, c に関しては相当量のデータがすでに Web 上のシステムにアップロードされているが、d, e は上記3つの文献群からの引用も多く、データベース・システムそれ自体を文献の相互参照性(インターテキストュアリティ)に即したものに改良しなければなるまい。

また、宗教とマイノリティというセンシティブな問題を扱うだけに、クラッキングに対してある程度の備えをする必要もある。高度に専門的な攻撃に対しては手の施しようもないが、SQL インジェクション等、比較的容易に行いうるものによってデータベースがいたずらに破壊されないよう、方策を考えなければなるまい。

制度面での問題としては、近現代のヘブライ語文学と古典文献の英訳・和訳に関して、知財権上の問題を解決する必要がある。

研究助成そのものは平成 24 年度をもって一度終了するが、研究代表者個人の課題としてこれらの問題の解決に努め、可能なかぎり早期にデータベースを公開してゆきたい。

## (2) 5 年間にわたるデータベースの構築過程で明らかになったユダヤ教の人間観

2008 年度は、ヘブライ語聖書の「人間」に関わる言説を収集し、同時にどのような術語が検索用語となり得るかを考察した。その過程で、ヘブライ語聖書自体に、様々な人間の分類に関わる言説、術語が多数含まれることが注目された。これは特にこれまで指摘され

ることなかったが、ギリシア神話、ヴェーダ神話など、神々の世界での神々の関係が主題となる他宗教の聖典と比較すると、ヘブライ語聖書自体が人間への関心、人間社会の分類に強い関心を示していることの証左となる。また、「人間への関心」「神々の関係性」という視座から、宗教学でも進展の見られない聖典比較研究の分析軸となることが示唆された。

2009 年度より、ラビ・ユダヤ教文献の様々な文献からのデータ入力を開始した。独自に作り上げたウェブ上のデータ入力フォームでの入力が開始された。特に現在のユダヤ教のベースとなるラビ・ユダヤ教文献の中でも、生活、慣習の法規に関わる分野の文献(ハラハー)からのデータ収集に尽力した。また、データ入力フォームは、ヘブライ語、英語、日本語の3言語によるものであり、多々のトラブルも発生し、それらをその都度解決しながら進めた。

データ入力フォームを設計する過程で、ラビ・ユダヤ教文献の様々な文献の章・節数を計上する必要があった。これにより副次的ではあるが、ユダヤ教文献の関心の相違(タナイム時代からアモライム時代にかけて、神殿祭儀に関わる部分の章数よりも、人間に関わる部分の章数が拡大されること)が観察されることとなった。

ラビ・ユダヤ教文献の中でもその中核となるミシュナについての入力、またタルムードにおける「マイノリティ」についての言説の収集につとめた。こうして蓄積されたデータから、特に「聴覚障害者、知的障害者、年少者」についてのデータに基づき、分析を行った。その結果、ラビ・ユダヤ教では、想定が可能な限りの事例について、とことん議論尽くすラビ・ユダヤ教ならではの議論システムのために、障害者でも健常者になりうる可能性が議論の中で想定されることが分かった。その結果、障害という状況を固定化させず、たとえ、障害をある時点で有していても、その人物の可能性を閉ざすことのない社会のベースを形成することになったのではないかと推察された。

2010・2011 年度もデータ入力を進め、特に「祭司」「預言者」についての言説が多く収集された。その結果、通常、近現代のユダヤ学が理想とし、ラビたちの営為をそこに重ねた「預言」「預言者」の営為を、ラビ・ユダヤ教自体は、それほど評価していないこと、むしろラビたちは「祭司」的系譜に自分たちを連ねようとしていることが伺えた。これは、近現代ユダヤ学のイデオロギーによるラビ・ユダヤ教文学像の形成という新しい問題につながる。

最終年度である 2012 年度は、データベースの整備、完成と研究成果のアウトプットが

目標となった。ユダヤ教文献の真髄を占めるミシュナ、ミドラシュ、タルムード等については、ほぼ完成に近づいた。ただし、ウェブ上のデータベースにはシステム改良の必要があったので、エクセルやワードの形でデータを蓄積した。近い将来、データベースの改良が図られれば、一括してデータベースにデータを移すことが可能である。特に、子ども、女性、家族関係の用語についてのデータが充実してきた。中世のマイモニデスについては、「迷える者への手引き」を中心に、預言者、祭司についての術語を収集した。また、現代ヘブライ文学についてのデータの収集も進み、広くユダヤ教文化を射程入れたデータベースの構築が進んだ。

### (3) 研究成果の発表と今後の展望

研究代表者は、本研究課題を推進するうえで、ユダヤ学に携わる海外の研究者とも密接な協力関係をもちながら、ユダヤ・マイノリティに深く関係する研究成果を、数多くの論文や図書の形で、国際的な舞台で発表してきた（次項「主な発表論文等」を参照）。

これらの多くは、中世のスペインや中東において、イスラームやキリスト教という当時の二大マジョリティ社会の中でマイノリティとして生きていたユダヤ人たちが生み出した文学作品（宗教詩や世俗的散文など）に関する研究である。これらのテキストにおいては、マジョリティ文明への憧憬と、自らの宗教的・民族的アイデンティティを保持する必要性との間での葛藤に苦しむ、当時のユダヤ人たちの姿を垣間見ることができる。

興味深いことに、これらの文学作品においては、ユダヤ社会内部に存在する様々なマイノリティや彼らに関する細かいユダヤ教の法的規則といったテーマが、しばしば好んで扱われていることが分かった。ユダヤ民族自体がマイノリティとして生きていくための知恵として、ユダヤ社会内部に存在するマイノリティへの関心を増大させることで、逆説的に自らのアイデンティティを保持しようとしてきた、ともいえるのではないか。

さらにこれらのテキストは、いずれもカイロ・ゲニザ文書といった中世の写本を直接解読し、解釈・分析したものを校訂版として発表したものであり、世界のユダヤ学界の中でも、極めてオリジナルな研究成果として高く評価されている。

また、本研究に携わった研究協力者らも、その成果を多方面で発表している。2009年度に京都大学特定研究員として本プロジェクトに従事した勝又悦子は、聖書では「預言者」とされるエリヤが、タルグム（アラム語訳聖書）では「祭司」と称され、ラビ文献中では「預言者」「祭司」と称されることに注目し、これらの資料を厳密に検証し、各文献での

「預言者」「祭司」観について議論した。この考察は、ユダヤ社会、思想史上において重要な層である「預言者」「祭司」がどのように受容されたかに関するものとして重要である（Etsuko Katsumata, *Lambert Academic Publishing, Priests and Priesthood in the Aramaic Targums to the Pentateuch*, 2012）。また、2009年度にカナダから招へいし、京都大学にて本プロジェクトの推進に協力したThomas Hentrichは、ヘブライ語聖書における身体障害者に関する研究成果を図書として出版した（Thomas Hentrich, Saarbrücken: SVH-Verlag, “Abgestempelt” Religion and People with Disabilities in the Ancient Near East, 2013）。

最後に、本研究で構築したデータベースを十分に活用したうえで、ユダヤ教の人間観に関して、本プロジェクトの成果を総括するような日本語による図書の執筆も現在続いているところであり、こちらも早期の出版を目指す。

### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計9件）

- ① Wout van Bekkum, Naoya Katsumata, The Piyyut Lexicon: A Morphological Search for Quadriconsonantal Verbs and Nouns in Jewish Liturgical Poetry of Byzantium and the Islamic East, *Frankfurter Judaistische Beiträge*, 査読有、vol.38, 2013（印刷中）
- ② Joseph Yahalom, Naoya Katsumata, Qontres Pereq Be-Shir by Joshua Benveniste: Hebrew Poetics in the Transition from Renaissance to Baroque, *Qovez Al Yad: Minora Manuscripta Hebraica*, 査読有、vol.21, 2012, 279-353
- ③ Wout van Bekkum, Naoya Katsumata, Shabbat Shim' u (Jer. 2:4): A Kaleidoscopic View of a Liturgical-Poetic Theme, *Frankfurter Judaistische Beiträge*, 査読有、vol.37, 2012, 75-107
- ④ Wout van Bekkum, Naoya Katsumata, Dictionary of Piyyut, the Preliminary Presentation of an Online Database, *European Journal of Jewish Studies*, 査読有、vol.5, 2011, 115-123
- ⑤ Naoya Katsumata, The Style of the Arabic, Persian, Hebrew, and Syriac Maqama, *Mittuv Yosef: Yosef Tobi Jubilee Volume*, 査読無、vol.1, 2011,

276-298

- ⑥ Wout van Bekkum and Naoya Katsumata, Piyyut as Poetics: the Example of Yannai's Qedushta for Deut. 6:4, Giving a Diamond: Essays in Honor of Joseph Yahalom on the Occasion of His Seventieth Birthday, 査読無、2011, 83-107
- ⑦ Wout van Bekkum, Naoya Katsumata, Importance of Saadia Gaon's Poetry to the Construction of a Dictionary of Early Medieval Piyyut: Example of Essa Meshali, Journal of Semitic Studies, 査読有、vol.56, 2011, 145-165
- ⑧ 勝又直也、勝又悦子、ユダヤ教の人間観、人環フォーラム、査読無、vol.26, 2010, 38-43
- ⑨ 勝又直也、ユダヤ教史の再考—中世へブライ文学からの試み—、宗教史学論叢 宗教史とは何か【上巻】、査読無、vol.13, 2008, 199-227

[学会発表] (計3件)

- ① Wout van Bekkum, Naoya Katsumata, Dictionary of Piyyut, the Preliminary Presentation of an Online Database, The IXth EAJS Congress, The Jews in the Mediterranean Context, 2010年7月25-29日、Ravenna (イタリア)
- ② 勝又直也、ユダヤ教の人間観、京大サロントーク、2008年9月9日、京都
- ③ Joseph Yahalom, Naoya Katsumata, Mahberet as Mission: The Creation of a Hebrew Book of Maqamat according to its Author, The Fifth Medieval Hebrew Poetry Colloquium, 2008年7月2日、Groningen (オランダ)

[図書] (計4件)

- ① Joseph Yahalom, Naoya Katsumata, Ben-Zvi Institute, The Yotserot of Samuel the Third - A Leading Figure in Jerusalem of the 10<sup>th</sup> Century, 2 Volumes, 2013 (印刷中)、1067
- ② Wout van Bekkum, Naoya Katsumata, Brill Academic Publishers, Giving a Diamond: Essays in Honor of Joseph Yahalom on the Occasion of His Seventieth Birthday, 2011, 334
- ③ Joseph Yahalom, Naoya Katsumata, Yad Izhak Ben-Zvi and the Hebrew University of Jerusalem, Tahkemoni or the Tales of Heman the Ezrahite by Judah Alharizi, 2010, 750
- ④ Naoya Katsumata, Mohr Siebeck GmbH & Co. KG, Seder Avodah for the Day of Atonement by Shelomoh Suleiman

al-Sinjari, 2009, 230

[その他]

ホームページ等

<http://judaism.jp/index.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

勝又 直也 (KATSUMATA NAOYA)

京都大学・大学院人間・環境学研究科・准教授

研究者番号：10378820

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし

### (4) 研究協力者

勝又 悦子 (KATSUMATA ETSUKO)

同志社大学・神学部・助教

研究者番号：60399045

コヘン ドロン (COHEN DORON)

京都大学・大学院人間・環境学研究科・特定研究員

向井 直己 (MUKAI NAOKI)

京都大学・大学院人間・環境学研究科・特定研究員

Joseph Yahalom

イスラエル・ヘブライ大学・人文学部・名誉教授

Wout van Bekkum

オランダ・フローニンゲン大学・人文学部・教授

Thomas Hentrich

カナダ・ジョージブラウン大学・教養学部・教授